

平一殼貝

師占爪女処



吉川英治全集

第5卷

編纂委員

川口松太郎

川端 康成

小泉 信三

小林 秀雄

佐佐木茂索

獅子 文六

講談社版

著作權者の了解
により検印廃止

吉川英治全集・5 貝殻一平 処女爪占師

著者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―二二(大代表) 郵便番号一―二
電話東京九四五局二二―二二
振替東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社 大進堂
本文用紙 日本バルブ工業株式会社特漉

第一刷 昭和四十三年七月二十日 第二刷 昭和四十六年四月十日

定価 七百八十円

© 一九六八年 吉川文子

目次

貝殼一平

一

処女爪占師

三五

貝
殼
一
平

消えた白絹

おそろしく大きな釜である。

聯想はすぐに、石川五右衛門の名をよび起すであらう程な大釜であった。

その醜い底と、巨大な口をもった物が、三つまでも、何の用意なのか、砂を淨めた山王の社の階前に、今朝から据えつけられてあった。

『暑いなあ、同役』

『あつい！』

『きようは少し夏らしいぞ』

『所で、これで何杯めだろう』

『左様さ、まだ四五十杯が関の山だろう』

『ほ、そんなものか』

『あの三つの釜に、この手桶で、百杯はらくにはいるそうだからの』

『そいつは、聞いただけでも、精がきれそうだ』

『もう一息、もう一息』

『まるで、汗を汲みこんでいるようなものだぜ』
日盛りであった。

赤坂山王台の境内には、撒き砂が白く乾きあがつて、そのサラサラした暑い大地を、白丁の袖をからげた衛士たちが、素はだして踏みしめながら、森の井戸から汲みあげた水を汗しずくになって運んでゆく。

桶をうけ取って掻いこむ者も白丁なら、箒をもって、そばから砂の足痕を消してゆくのも白丁の男であった。

干渴の千鳥のように歩いてきた衛士たちの労働も、ひとしきりで終ると、やがて松薪が山と組まれ、三人の焚き手が、釜と相談するように、うしろ向に坐りこんだ。

『どれ、これでひと涼みだ』

と、白丁の襟を直して、ほかの衛士たちも位置につきながら、蟬しぐれと一緒にシューッと吹いてくる涼風に、半刻ばかり静かな睡気に誘われていた。

と……。おおまかな太鼓の音を合図に、ゆるい、古雅な奏樂が、どこからか不意に聞こえてきた。鈴、ひちりき、笛、太鼓……。

焚き手はすぐに火をいれた、松薪の火がドカドカと釜の下から鮮麗な焰を見せると、またたくまに、白い湯けむりが拝殿のひさしに巻き上って、湯はグラグラと湧きたぎってくる。

その炎の色と、すさまじい熱湯の波を見つめていると、頭上の日光もこたえなくなつて、むしろ痛快な涼味さえ感じられる。

——こうして、毎年五月二十五日に、必ず江戸城から代参が立つて、將軍家と大奥から祈願の神文をささげる慣わしになっている、山王の行事「湯花祈禱」の式は、四ツ半の自鳴鐘を秒もたがえすひらかれた。

x

『お待たせ仕りました。内陣の用意もとのいましたから、どうぞあちらへお着席を』
別当の神官鈴木浜臣は、蟬のような衣冠すがたで、静に、奥へ告げに来た。

そこは、庭の池泉をきよめて、代参の休息所にあてがわれていた十二畳の室である。更えたばかりの青畳の上へ、襟も帯も色のものをつけぬ白絹づくめの婦人が、すべらかしの髪に根にだけ、わずかな紫の布をとめて、しとやかに坐っていたが、『ご大儀でした』と、浜臣へ向つて、品の高い目礼をちらと返した。

例年、山王代参のお使は、大奥の婦人ときまっていたが、当日の使者も、西の丸つきの扇子の方という妙齡な女性であった。

『では御案内を。……皆の者も』

側の人々に目くばせをして、そこにサラリと白絹の人が滝のように立った気はいはおぼえたが、浜臣は威にうたれて、扇子の方の美しさを正視することができなかった。

彼女が、拝殿へ立つてゆくと、そばにいた四、五人の女中と、袖部屋にいた二人の伊賀者とが、あとについて同席した。大奥の女性が外出して、男と対談する場合は、必ず伊賀者が立ち合う掟になっている。で、この神前でも、拝殿の裾にひかえた伊賀者の目は、油断なく光っていた。

やがて、願文を神前にあげて、式事がすすむと、三座舞の鈴を振っていた美しい巫女が、階から釜の前へ降りて、その白無垢に緋の袴のすがたをも焼けよとばかり、炎に裾をなぶらせて凝と立った。

『は？ ……』

『湯花祈禱でございますな』

拝殿の上のものは、みんな好奇な目をみはっていた。巫女は、九字を切るように熊笹の葉を振って、釜の熱湯をあびる真似をしながら、懸命に祈りの境にはいるのだった。

そのうちに、始めは、口のうちにいついてた祝詞の声も、次第に、甲だかくあらく口走ってきた。そして、笹の葉にふれて散る熱湯の玉が、しばしば彼女の肌を爛らしはしまいかと思われた。

人々は、一種のすぐ味にうたれて、またたきもせずに巫女の姿を見つめていた。耳は古雅な奏楽に魔睡されていた。

すると、ちょうど、その時刻だ。

山王下の下馬札の前にヒラリと駒をすてて、その大櫃に馬をつないだ三名の武士があった。

馬も侍も汗にぬれて、夕立に会って来たようにグッショリである。見るとその三名は、大目付永井主水正の手についている、与力と同心の某にちがいない。

『オオ、始まっているな』

『三座楽のひちりきの音が聞こえる』

高い石段を、三名はほとんど飛び上るように駆けて登ってきた。そして境内に立つが早い。

『浜臣、式を待て』

『祈禱を中止せい！』と、何か大変が起ったように絶叫した。

『やつ、お目付の衆が……』

拝殿のものは驚いて、一時に立つてざわめいた。——けれど夢中になっている巫女の祈りはまだ醒めなかった。

『やめると申すに！』

突然、湯花祈禱の式場にすがたを見せた与力たちは、巫女の

そばへつかつかと寄って、叱りつけるような声でいった。
『きょうの神事はお沙汰やめになったのだ。ひかえろ、ひかえろ』

あつげにとられた巫女は、紙のような顔色をして、うろろうろしている衛士たちの蔭にかくれた。

与力はずづいて、拜殿へ上って、

『管理院の別当は？』

と、そこらを睨め廻した。

『わたくしにござります』

『貴公が鈴木浜臣であるか』

『はい。てまえが浜臣でございますが、いかに大目付の御配下とは申せ、例年きまつて行われる今日の御神事を、ふいにお差止めとは心得ませぬ。第一、御神文を立てられた前で、ご無礼でございましょうが』

『その辺も心得ぬのではないが、火急の台命です』

『えっ、ご上意ですって？』

『無論！』と、語を強めて、

『さもなくて、なんで式事をさしとめましょうか。われわれは大目付永井主水正のお扱いとして、今日代参のお使者、扇子の方にござんがあるによつて、即刻、連れ戻れというおいつけをうけて参ったのじゃ。その扇子の方は、いずれにおるか』

『や？……扇子の方は？』

与力たちの陰しい目につれて、自分もうしろを見廻した浜臣は、腰をつかれたように吃驚した立ちざまをして、

『そういえば、いつの間にかお姿が見えないが、扇子の方は？』

『オオ、扇子の方？……』

と、たれに口走るともなく、内陣から脇殿の間をのぞき廻った。

——いや、浜臣ばかりでなく、女中たちや伊賀者も、初めてその人の席の空虚になっているのに気がついて、

『どこへ行かれた？ どこへ』

と、狼狽の渦を描いて、立ち騒いだ。

——遅かった！

与力たちの目まぜには、明らかな悔が読まれた。

けれど彼等は、いたずらにそこに暇どってはいなかった。ばらばらと廻廊をふんで、目ざすところの奥の室へ駆けこんで行った。

『居らん』

と、先のものが、絶望的な声をたたきつけた。

『その隣りの部屋は』

『ここにも』

『では、別当の方ではないか』

『或は』

橋廊下をこえろと、管理院の住居であつた。そこを聞ごとのぞいて行つた。然しどこにも扇子の方の姿は見あたらない。

『お、その奥にも一部屋あるではないか』

『襖が閉まつておるが』

『台命でまいった役目だ。かまわん。開けてみる』

ひとりがさつと襖をひらいた。

部屋は裏庭へ向いた十畳の客間で、床に水墨の山水が一幅の涼味をはらんでかかっているほか塵ひとつなく掃除してある。

『やっ』

『どうした』

と、後の者も、あわてて首をつッ込んでみた。すると、その客間の縁先へ、一塊りの雪のように、白絹のかいどりが脱ぎすてられてあるではないか。

飛びつくように、そこへ行つて、

『おっ、これだ』

と不用意な手につかみ上げていると、麝香^{じしやう}か、止木^{とぎ}のかおりか、酔うような香料のたぐいと、女性のにおいが、ぶーんと、彼等の顔にくるまつた。

『——とすると、この裏の竹やぶから逃げおつたのではあるまいか』

『そうかも知れん。したが、まだこの絹には温もりがある』

『それでは、ことによるとまだその辺に潜んでおるやも計りがない』

『しッ……』

不意に、ひとり声が制して、そこから縁つづきの、書斎らしい一室へ目をやって、

『たれか人がおるらしいぞ』

と急に声を落してさきやいた。

成程——耳をすましていると、かすかに人の気はいがするようでもある。都合のよいことには、裏障子があけ放してあるので、彼等が、這い寄つてのぞいてみるには、何の苦もないことであつた。

ひとり膝を落して刀の柄がしらで廊下を突かぬようにしながら、ソッと前へすすんで行つた。

そして、慥にいる！ と後の者へ目でいった。

三名とも、音をぬすんで中をうかがつた。けれど、そこに居たのは、白絹をぬぎすてた婦人ではなかつた。

縁先にあるほてい竹の細かい葉をとおしてくる風に吹かれて、ひとりの若い浪人が、心地よげに足をのばして、昼寝をしていた。

その足もとに、小さな鳥猫^{からすねこ}がウットリと半眼になつてうずく

まつている。

何者だろう？

管理院の奥に縁のない若い浪人。そしてすぐそこにあつた白絹のかいどり。

息をのみながら、与力たちの鋭い眼は、じつとその寝姿を見つめ合つた。

顔に団扇をあてているので、遺憾ながらその面は見えないが、ふつうの儒生や若侍がきる黒の単衣に、石帯をむすび、左伝春秋かなにかの書物を四五冊、枕がわりにかつて、胸のわきに大刀をかかえている。

いや。

それらの事よりも、三人の目がひとしく吸いつけられたのは、畳の上へ投げ出されてある彼の右手の甲にある、豆つぶほどの黒子だつた。

ぶーんと、蠅が一匹、軽い羽音を舞わせていた。

浪人の寝顔にのつている団扇の手が、時々、無意識にそれへうごく。——そのたびに、胸によせかけてある紺糸巻の刀の柄が、少しずつ下へすべりかけている。

部屋の外に立ちすくんで、睨むように見ていた与力たちは、『こやつ、てつきり空寝入にちがひがあるまい。何もかも承知しているのだ』

と、その姿を読んだ。

或は、そうかも知れないのである。いくらうつつを装ういても、投げ出している五態のうちに、自然の気構えというものがあれば、ぜひと何処かに現れるはずだ。あながち役人的な邪推とばかりはいわれない。

くさいぞ、この浪人は。

ひとつ叩いてみようじゃないか。
よからう！

三名の目まぜが瞬間に一致すると、ずかずかと室の中へはいって行った、そして、

『起きろ』

『おいッ、起きないか』

と、声をかけた。

知っているのかいないのか、對手は身うごきもしなかった。同時に、これは一すじ縄ではゆかぬと思つたらしく、三名は無意識のうちに身構えを直して、

『起きろと申すにッ。おい、浪人、浪人』

と、焦れ気味にくり返した。

そして顔の団扇を蹴飛ばそうとしかけたせつなである。一人の足の先は、ぴくっとか何かを見て竦んだ。

——最前から起きているじゃないか、何をわめいているんだ。

そういったふうには、浪人は、いつのまにかぱちりと眼を開いて、団扇のかけから三名の血相を、じいっと均等に見廻しているのだった。

そして、静にいった。

『……なんでござる？』

与力たちは、彼がぎょつともせずに、また体も上げないで、冷然と投げた返辞には、却って底気味のわるい圧迫を感じたにちがひなかった。

『問いただす事があるから直れと申すのだ。無礼であろう、その態は』

『心得ぬことを仰有る、ここは拙者の居室ですぞ。寝ておろうと、頬杖をついておろうと勝手なわけです。無礼といえはそち

らのことだ。誰に断つてここへはいった』

『だまれ。火急の場合に、いちいち会釈などはしておられん。われわれは、幕府の大目付永井主水正の旨をうけて参つた公迎のものだ』

けれど浪人は、その威嚇にも驚いた様子がない。しいて彼の顔に感情らしいかけの動いたのを探せば、それは對手が常習的な語調で、幕府とか、大目付とか、仰山にならべ出すのを、憫れむような冷蔑と反抗を、笑くほにして迎えたぐらいなものである。

と、不意に彼は、縁先へ起つて行つた。——逃げる！とでも感じたか、ひとりの与力がついと廊下へ先廻りをしたが、浪人はそんな動作に目もくれないで、細かい笹の葉のかけから流れ出ている掛樋の柄杓に手をのばして、一掬の水を口にふくんだ。

そして、座にもどると、枕にしていた書冊を床の上へ運んで、

『くだぬ作法とがめをして、兎戯のような押問答をしていてもしかたがありません。どういう御用か、承わろう』

刀をよせて真四角に膝を折つた。

与力たちは、その時、對手の容貌を正視した。見ると、これは案外若い、まだ二十五六にしかなるまい、いかにも整つた眉目で、端正という美男であつた。儒家の書生のように青白くなく、馬術家のように粗野でない頬を持った横顔に、軒先の梅の青葉が若々しい反射をそえて、寝起きの耳がすこし紅い。

今、彼が片よせた、床の間の雑書を、じろつと見やっていた与力のひとり、まず先に口を切つた。

『貴公、蘭書を耽読しておるな』

『友人から借用の書でござる』

『蘭斎の著書やら、神学のものやら、だいぶ王学のものが多いようだが……』

うさん臭い目つきで対手の態度を檢視した。それらの、尊王思想を内容にした類の書物を手にする人間は、当然、幕府の注意人物と危険視して、さしつかえないものと心得ているのだ。

『御用とは書物のことですか』

『いや』と、すばやく語気を更えて、

『——この白絹のかいどりを脱いだ女は何処へ参った？』

『ほ……。それは何者の小袖ですか』

『しらを切るな！ 西の丸づかえの扇子の方が、これへ逃げて参ったのを、いずれかへ匿まってやったであろうが』

『扇子の方という、大奥の人間とこの私とに、どういう縁故があるといわれるのか』

『だまれッ。ついその縁先に、これを脱いでかくれたものを、知らぬとはいわさんのだ』

『しかし、拙者は寝ておりました』

『その空寝入がなお怪しい。なんと申しても、このかいどりが証拠ではないか。真っ直にいつてしまえ』

『何も知らぬ寝入りばなへ、これは迷惑な……』と浪人はふと、机の下から這い出した烏猫の脊を手で撫でてやりながら、

『はあ、察する所、かいどりを啜えて来た悪戯者は、このチビに相違ありますまい、悪いやつだ』

呟いて、小猫を膝の上へのせた。

小猫はのどを鳴らして、浪人の胸から肩へ爪をのばしてゆく。

彼は、そこに公権をかさにきてのぞんでいる与力たちの存在も忘れたように、

『コレ……』

と、他愛なく、猫の首へ手をかけた。小猫はまた、じゃれついで、その指先を桃色の舌でねぶり廻している。

その時も、与力たちは、彼の手の甲にまぎまぎとある一つの黒子を、生涯忘れまいほど、明らかに見た。

『よしッ、どうあってもいわぬとあれば、引ッ縛ってゆくまでのことだが、それは承知か』

十手袋を脱した短い光りが、キラと目を射て、手の裡にかくれた。

『どうもぜひのないことだ。その辺は、ご随意に』

いきなり、力まかせの片足が、彼の肩先を狙って、汚れた足袋の裏を見せた。

仆れる所を、ねじ抑えて、十手を食わすつもりであったが、浪人がツイと身を退いたので、吃驚したからす猫が、ほんとその与力の肩へとび移った。

『邪魔なッ』

叩きつけられて、猫は畳にもんどりを打った。同時にその弾力で、一足跳びに庭へ逃げてゆく。

そこへ、どこかどと人の足音が流れてきた。

扇子の方のことで目の色の変ったいくつもの顔の中から、浜臣が走りだして、

『おう沢井様、なんとなさいました』

『やあ、禰宜どの。よい所へ来て下すった。思わぬ濡れ衣をきせられて、弱っているところだ。拙者に代って、弁明して下さい』

『神官』

と、与力は血相を向けかえて、

『この浪人は其方の知り人か』
『ご勉強を遊ばすために、この別当の一間をお貸申しあげております』

『どういう縁故で』
『歌道の方では千蔭様の同門でございまして、以前から、ことにお親しくしておりますので』

『姓名は』
『沢井軼様と仰言、います』

『藩籍はどこじゃ』
『さ……』

と浜臣は目をうつして、軼の方へ答えを渡した。

『藩籍はござらん、父の代から浪人です。ただし、郷里は伊豆の真鶴、業はやぶ医者、自分は勉学のために江戸表へ参っております』

ばかりばかりと句点を打っていったのが、軼は自分でもおかしいように、少し笑いをふくんで、

『何か、小癪におさわりか知らんが、今のおたずねは、まったくの寝耳に水、どうご折檻でも返辞に窮します。誰か、逃けたものをおさがしならば、こうしている間こそ無益な暇つぶし、早くほかをおたずねあつては如何ですか』

『あ、その扇子の方ならば』

と、浜臣が口を出すと、与力たちは敏感に、

『何か、足跡があつたか』

『ありました』

『やつ。あつたど？』

『はい、それをお知らせに参つたので。——ご三名がお越しの時、山下の下馬札のところへ、馬をつないでお置きにはなりませんでしたか』

『ウム、三名の駒をつないでおいたが』

『ただ今、衛士の者の知らせではそのうちの一头が、いつのまにか見えなくなっておるそうで』

『えつ、一头の馬が見えない？』

『はい……もしや……』

『出しぬかれたか！』

突然、三名の与力同心と、ふたりの伊賀者は、そこらにまごついている者たちを刎ねとばすようにして、ばらばらと、元の廻廊から山下の方へ、のめるように、駆け出して行つた。

浜臣は、その混雑の隙をみて、

『沢井様』

と、軼へ目くばせをして、物蔭へ呼んだ。

『どうしたわけだ、きょうの騒ぎは』

『ご代参に立つた扇子の方は、たしかに公卿方の廻しものでございまして』

『ふーむ……』

と、軼の満面が会心の笑みにかがやいた。

『ただ今あらで、あとから駆けつけて来た公儀の人たちに伺いますと、昨夜おそく、柳営の奥で、閣老たちに、海軍奉行なども交つて、密議があつたよしにございます』

『ウム』と、きつく唇をかむ。

『その席でとりまとめた、重大な軍機の書類一封、深更に將軍へお手渡しをしたものが、今朝までの間に、櫓の間の御文庫から紛失したのでございます』

『それを扇子の方が手に入れたのか』

『……まだ御嫌疑中ではございますが』

『やつたな！』

『きょう山王の御代参に立つことは、前から分つていたこと』

故、この離れ技をしたのでございましょうが、女にして、よくもその度胸が……」
『今の、濁りきった世相、衰微しきった朝廷のありさまをみれば、それ位な血は、たれの心にもわく。……だが』
と、ふと彼は涼やかなその眸を、何をか案じるように、窓越しの空へさまよわせた。

ひとり旅

大奥の代参として、氷川ひかわに使いたした扇子せんこの失跡は、その日、山王の宮ばかりでなく、奉行所をはじめ、市中三十六門の見附、要所の番屋、そのほか、あらゆる警治機関の役人や岡ッ引をして、旋風の狂奔きやうほんをさせたのであった。

しかし、日ぐれまでに、帰着したところは遂に一つだった。不明――

すべての報告が、二字でつきた。

氣味のわるい波紋をのこして、底無し沼へ沈んでいった山椒魚のように、扇子の方の名は、それらの人々のあたまたに暗い謎を預けたのみである。

そして、江戸の町の上へ黄味を帯びた夕月のかげが、なにととも知らぬように顔をだした。

『大奥のうちにも、あんな女が入りこんでいるとすると、吾々もよほど考え直さなければなるまい』

奔命につかれた三名の与力と同心は、やがて六刻むくすぎごろ、その疲労を押して、江戸城の坂下役所へかえてきた。

『お表のことなら、手段もあるが大奥ときては、古来吾々の不

可侵境だから、どうにもならない』

『ならんと言つても、きょうのような事件が起れば、その始末はたれがする』

『閣老方でも、大奥という毒草畑の花だけは、鋏はさみをもってバチバチとやる勇氣はないのだ』

『その責任者はいえ、將軍家ご自身と申しあげてもさしつかえない。ことに、今日のような時局にはやっかいな代物だ。大坂城も大奥から亡びている……』

と、いいさして、与力たちの眼は、ふと彼方の広場に氣をとられた。――大手前にあたるその辺には、螢が陣を布いているように、無数の提燈ていとうが幾組にもなつて月下に列をつくつていた。

『きょうも、勅使はまだお退城たいせうりにならんとみえるな』

『毎日の御登城で、毎日の膝づめ談判、閣老たちも疲れたろうが、大原三位とかいう公卿も、若いに似ず、腰のつよい人だ』

そんなことを話しながら、三名は役宅の方へ曲つた。

詰所には、無論、自分たちの上役である主水正が、待ちかねているであろうと思つたが、その大目付部屋めつけの机には、

(私宅にて会い申すべく候。介堂)

と、書き残してあるだけであつた。

介堂というのは主水正の別称で永井玄蕃げんぱんでも、永井介堂でもとある。

『私宅でお目にかかるのは、いよいよ面目ない』と、三名は顔を見合せたが、そうしてはられないので、湯呑場で、朝から初めての一杯の湯にのどをうるおし、すぐ四谷窪町よこかぼちの主水正の私邸へ急ぎだした。

玄関の空氣をみると、きょうの変事の対策には、江戸城より奉行所より、却つて、この一私邸の方が枢務の中脳部となつて

いたようなあんばいで、召使たちも眼色をかねて緊張していた。

『お待ちかねでございます』

三名はすぐ奥へ通された。

客間がふさがっているのか、彼等が通されたのは、せまい茶室であった。京土の小床に、伊賀焼のつばが一つ。それへ色の浅い夏ぎきの桔梗が一本投げてある。

永井家は旗本格であった。主水正は能登守の養子で、幕府学問所の俊才だ。

まだ四十をすこし越えたばかりであるが、徒士頭の布衣から、長崎事務見習、海防係、外国奉行などの要職を経て、今は大目付という、時節がら難役という大任をひきうけている。

やがて、その人の声がした。

『やあ』

と、至ってただけにいる。

三名は、とび退がろうとしたが茶室なので、寄れるだけ隅へさがって、膝を固くした。

『御苦労だったな。きょうは』

『詰所の方へまいりましたところが、すでにこちらへ御帰邸なので』

『わしもきょうは忙しかった』

『なんとも、残念にござります』

『あの報告なら、いま、岩瀬殿や町奉行などから聞きとった。』

『どうもぜひないことだ』

さすがに語尾には重い息があった。

『で……今となつては、あまり仰山に騒いでは却つてまずい。

折から、勅使の詰られておる際でもあり……』といつてこのまま抛つておくことはなおできぬ』

三名は、ただ唾をのんでいた。

『どうするか？　これがこの後の問題だ。女を持ち去つたものが、朝廷のお手にはいる時は、時局の不利を招くことは勿論、上の御後難もおさるべきことになる』

『もし、お許しくださるならば、吾々三名が誓つてそれを』

『ひきうけてくれるか。それはわしからもこうして頼む。だが今もいった通り……』

『すべて機密のうちにやりまする』

『ウム、それでは、西の丸の表役人からよこした、扇子の方の人別がここにある。いわばあの女の素姓調べをしたものだ。心得のために、見ておくがよい』

扇子の素姓。

それこそ、何より先に、知りたく思っていたことである。

三名は、燭をよせて、すこしずつ膝をすすめた。

急場になつて、あわてて調べたらしい「扇子素姓書」というのは、次のような、いたつて断片的な記事でしかなかった。

西城呉服の間出頭。

姓、中山扇子。

年、二十三歳。

前の大納言中山忠能の女。

天保丁酉、生家、京都石薬師通り北側の邸に生る。

右は、前の御台所文聚院様へ御用命をおびて度々京都より下向のせつ、お気に入りの仰せにて大奥に止められ、その儘お仕え申し居たるものに相違なく候。

因みに扇子の家兄忠光は性狂燥のため系類のものとも絶縁し、流浪人共の群に入りて居所不定の由に候。

『ウム……文聚院様といえは榮宮様のこと、そこへ、京都か』

らたたび使に來た女……扇子の方……なるほど有りそうな事だわえ』

首を寄せあつた与力の者は、その文字のなかへ、すべての官能を遺失してしまつたように、茫然と、眼をはなすことを忘れてゐる。

『杜撰なふしもあるが、多少の参考にはなる。一見したら納めておくがよい』

主水正はそういつて、次にまた一葉の紙片を彼等の前へひろげた。

見ると、亜欧堂風な蘭画の線をつかつて、かなり精巧に描いた扇子の似顔である。

『人相書には、これを原図に用いるがよからう。かなり真に近いものだ』

『オオ、なるほど、生き写しで』

と、思わずいつたが、三名とも扇子の方なる人の面ざしは、初めてそれによつて知つたにすぎない。

『実にどうも、驚き入つたことで……』

『なにが左様に意外なのか』

『意外ともなんとも……まさか扇子の方が、前大納言家の娘とは、夢にも存じませぬことで、そうとすれば、この後の手段にも、よほど大事をとる必要がございます』

『いや、公卿の娘だからといつて吞まれていたり、手加減をし

ずぎては、埒が明かんぞ、近ごろの公卿には、ずいぶん食わせ者がある』

『全力をもつて、御奉公いたします』

『当分の間、其方たちは、それにかかり限りのつもりで居てよからう。案外難物かもわからぬ』

『はっ』

『おいそれとは行くまい。時日もかかるものと見ておくべきだ。腰を入れてやってくれ』

奥には、もう二三名の来訪者がつめかけている様子で、庭越しの樹間に見える幾つかの部屋には、みな煌々と灯がかがやいてゐた。この大目付という一私邸の空氣をのぞいただけでも、いかに今、天下の風雲が險惡で、幕府自身がその多端な時局におかれてゐるかということがよく分る。

幕府の職制によると、大目付には五十騎の与力と、それ以上の同心が附与されている。きょうの事件で奔命した部下は、そのうちの加納金十郎、青木鉄生、長谷川由藏の三名であつた。

三人は、まもなく永井家の外へ出た。

多分は医者いしやの娘か、よくても一士分の娘ぐらいに思つて、こよいを過ぎたところでどんな対策もあるように思つていた相手が、前大納言忠能の息女であるとかかつて、なにか出ばなの氣鋭をへし折られた感じがなくてもない。

誰のあたまにも、どうする？ という方針も立っていなかつた。

先に吞まれてゐては埒が明かんぞ——と主水正が自分たちの氣を觀ぬいて叱つた。

『……この事だな』

と青木鉄生は首をふつて、連れのふたりを顧みた。

『ともかく今夜はわかれて、各々の家にかえり、充分からだを休めようではないか。万事は、その上の策として』

『うム、改めて明朝落ち会うとしよう』

『どこで』

『極まつてゐるではないか。いつも集まりごとといへば坂下の詰所だ』

『だが、扇子の方についての一切の仕事は、今日以後、断然秘

密のうちに運ぶようにということを、主水正殿から再三ならず念を押されているが、役宅では、他役の者も出はいりして、まずくはないか。

『む、その懸念はある——』と、加納金十郎は曲がり角へ来て、立ちどまりながら、

『じゃいっそ、縁のない所がよいだろう。淀橋の用水堀のそばに、万亭という釣堀屋がある、あれへ行つて、ゆつくり方策を打合せてはどうか』

『万亭なら人目につくまい。明朝だな』

『五ツ半ごろ』

『承知いたしました』

と、青木鉄生ひとりとは、まだ同心格で、組屋敷に住んでいる身なので、四谷の辻から権田原の方へすたすたと曲がつて行つた。

すると——青木に別れた二人が、半蔵門の方へ肩をならべてゆくと、間もないことであつた。藍みじんの単衣に、博多の細いのを横ッちょに締めた町人が、宙をとぶように駆けて来たと見ると、

『おうつ、長谷川の旦那に、加納様じゃございせんか』

と、足をとめた。

『定か。どうした』

『旦那方も今夜だけは、詰所の方にいることばかり思つていたので、大面食らいをしちまいました』

『ふーム……何の急用だ』

『扇子の方のことなんで……。女め、えらい所へ潜りこんでおりますぜ』

定、あだ名をかぶせれば、泥亀の定といつて坂下組の手先である。

すつぽんといわれる彼の潜行が、どこでなにを見出して来たか、腕を曲げて額の汗をこすつた。

すつぽんのことを聞いて、長谷川と加納の二人はふと皮肉な感じをお互いの顔に見合つた。——これは家へ歸つて寝るどころではないぞと。

『定、落着いてよく話してくれ。するとなにか、貴様があの女の潜伏した先を見とどけて来たともいふのか』

『へい、それもツイ目と鼻の先だからおどろきました。誰でも気がつきそうな所で、誰も思ひおぼえ場所なんて』

『どこだ？　それは』

と落着けといつた長谷川の方からして、思わずこう急ぎ込んだ。

『うー』

『はつとして、一つ當つてみようかと思いましたが、場所が場所ですから、先に依つては、もし間違つちゃあ大変だと、二の足をふんでる間に、女は通用門の潜りから中へ姿を消しちまいしました』

『なるほど、下向中の勅使と扇子の方、この二つの脈をむすび合せてみると、十分に疑う値うちはあるが、ただそれだけの事じゃ困るなあ』

『いえ、決して目違いじゃございせん。念のために、帰る駕屋を取つ捕まえて、十分にだめを押してきた揚句でございませう。駕屋のいうには、三田の青巖寺から出て来たんだそうで、